

## 律蔵の成立問題に関する現在の状況

佐 々 木 閑

現存する律蔵資料において、波羅提木叉・經分別部分に関しては、すべてがほぼ一致しており、同一系統であることは間違いない。問題は犍度部の方にある。諸律のうち、『摩訶僧祇律』の犍度部相当箇所（雜誦跋渠法および威儀法）だけが特殊な構造を持っているのである。この問題に関して、以下、三人の研究者の意見を紹介し、特に最新説である第三番目、Shayne Clarke の説の問題点を考察していく。

**フラウワルナー (1956)** (*The Earliest Vinaya and the Beginnings of Buddhist Literature* の中の犍度部の成立に関する説)

1. 律蔵犍度部の冒頭には本来仏伝が置かれていたと考える。現存律ではパーリ律、『四分律』、『五分律』が仏伝を含んでいる。『十誦律』に含まれていた仏伝は、独立して『四衆經』になった（佐々木：『四衆經』は『十誦律』ではなく『根本説一切有部毘奈耶破僧事』と対応する仏伝である。したがってこの点に関するフラウワルナーの説は成り立たない。佐々木閑「根本説一切有部律にみられる仏伝の研究」、『西南アジア研究』24号、1985年、pp.16-34）。「根本有部律」でも仏伝は犍度部の冒頭、すなわち出家事の冒頭に置かれていたが、後に破僧事に移された（佐々木：これは正しい。上記佐々木論文）。『摩訶僧祇律』にも仏伝が含まれていたが、独立して Mahāvastu になった（佐々木：おそらく正しい）。
2. その仏伝は、本来、ガウタマ王子誕生の箇所から正覚を経て、初期の教化活動（すなわち舎利弗・目連の出家）までを語るものであった。部派によっては、そのうちの前半だけが切断されて独立仏伝として伝持されることもあったので、律の中には、話が悟りの場面から始まるものもある（たとえばパーリ律）。（佐々木：ここは、仏伝は本来、悟りの場面からであったとする平川の説と食い違う）
3. 律蔵犍度部の末尾には、シャカム二涅槃の話と結集の話が一連の物語として置かれていた。『摩訶僧祇律』や「根本有部律」は、そのような構造を保持し

ているが、他の律では、涅槃の話だけが独立して「涅槃經」として伝えられた。

4. したがって、律の犍度部は、仏伝を枠組みとして編纂されたものである。以上のことから、律蔵の犍度部は、冒頭の仏伝と末尾の涅槃・結集記事に挟まれた形状になっていることが分かる。したがってそれは仏伝を大枠として編纂されたものである。各犍度も、単なる僧団規則の集積ではなく、シャカムニ時代の様々な事件を枠として語られており、それぞれが仏伝の構成要素という側面も持っている。その完成時期は、ヴァイシャーリー結集と根本分裂の間と推定される。

5. 末尾に第一結集記事が置かれたことには隠された意図がある。それは、ウパニシャッドにならって、シャカムニという人物がまとめて説いた教えを代々の師が受け継いだという形式を導入するための必須要素であった。『摩訶僧祇律』と「根本有部律」の二本は、第一結集記事（いわゆる五百犍度）と第二結集記事（いわゆる七百犍度）の中間に、教えを伝持した比丘の系譜が存在している。両者のうち、有名でない人名を挙げる『摩訶僧祇律』の方が古形だと考えられるが、その記述方法は、ウパニシャッドの書き方にそっくりである。ただしウパニシャッドでは、ブラフマンがまとめて説いた言葉を、代々の人たちが伝えたというかたちで構成されているが、仏教の場合は、シャカムニの教えは、時期も対象者もばらばらで、散発的に説かれたと理解されているので、「まとまったシャカムニの教え」という概念がない。この問題を解消し、「ある時まとめられたシャカムニの教えが、代々の師によって伝持された」という歴史を権威づけるために、第一結集記事が創作され、律の末尾に置かれたのである。したがって、第一結集は架空の事件であったことになる。一方、第二結集記事は、それが律中に存在する必然性がないから、現実起こった事件の記録だと考えられる。

以上の考察により、必然的に、『摩訶僧祇律』の犍度部（雑誦跋渠法および威儀法）も本来は、他の上座部系律の犍度部と同じ構造を持っていたことになる。ということは現在の『摩訶僧祇律』は上座部系諸律を原形として成立したことになる。



そこでフラウワルナーは、研究の末尾で、上座部系諸律の犍度部がどのように改変されて、『摩訶僧祇律』犍度部になったのか、そのプロセスを説明する。その

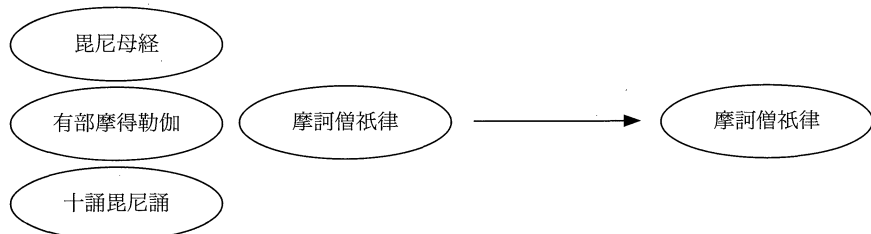
際、「上座部律犍度部と『摩訶僧祇律』犍度部は、個々の要素に関しては大方一致するのに、全体の構造が極端に違っている」という事実が、考察の前提となる。すなわち、「個々の要素に関しては大方一致している上座部律犍度部と『摩訶僧祇律』犍度部が、構造に関してのみ大きく食い違っているのはなぜか」というのが解くべき問題とされており、それが、上述の仏伝を枠組みとする犍度部研究の結果を根拠として解き明かされているのである。したがって、『摩訶僧祇律』の構造に関するフラウワルナーの説の是非を問う場合は、その根拠となる、仏伝を枠組みとする犍度部研究の是非が問われねばならないということになる。

印順（1994）（『原始佛教聖典之集成』 pp.251-393 の中の犍度部の成立に関する説）

1. 「摩得勒伽（mātrkā）と呼ばれる文献群が存在し、『摩訶僧祇律』の犍度部（雜誦跋渠法および威儀法）も、その摩得勒伽文献のひとつである。上座部系諸律の犍度部と、『摩訶僧祇律』の犍度部は、個々の要素には一致するものも多いが、全体構造は大きく異なっている。ところでその『摩訶僧祇律』の犍度部と同じ構造を持つ文献が複数存在する。それは『薩婆多部毘尼摩得勒伽』、『十誦律』『毘尼（丘）誦』、『毘尼母經』である。『摩訶僧祇律』犍度部も含めたこれら四本は、「摩得勒伽」と呼ばれる、同一構造の文献群とみなすことができる。
2. 「摩得勒伽」は mātrkā という名称からみて犍度の母体である。シャカムニ在世時、すでに制定されていた僧団規則が、第一結集の時に波羅提木叉として誦出されたが、その時、波羅提木叉に入らない領域の規則が、項目だけ列举されて「摩得勒伽」となった。この段階での「摩得勒伽」とは、解説文を含まない、純粹な項目列举であった。後にそれを注釈するかたちで解説が付された。そのかたちを残しているのが『摩訶僧祇律』の犍度部である。現存する波羅提木叉の末尾に「随順法」なるものが言及されるが、これこそが原初の「摩得勒伽」を指している（佐々木：これは間違い）。このことから、「摩得勒伽」文献の中では、『摩訶僧祇律』の犍度部が最も古く、その他の三本は新しいということになる。（佐々木：印順説によれば、仏在世時代、律の規則の大部分はすでに制定されていたということになる）
3. 犍度部の成立順序は次のようになる。第一結集での原初「摩得勒伽」の成立 → 第一結集記事が後記として付された → 第二結集の時にそれが整理増広され、末尾に第二結集記事およびその他の付録が付された → 根本分裂によって二部に分裂し、大衆部は「摩得勒伽」を骨格とする、原形に近い犍度部を

伝持し、他方の上座部はその構造を大きく改変して、現在の上座部律犍度部をつくった → しかしその後上座部は「摩得勒伽」も保持し続け、そこに後代の情報を挿入することで、一種の解説書としての機能をもたせた。それが『薩婆多部毘尼摩得勒伽』等の三文献である。『毘尼母經』には、「薩婆多」「迦葉維」「彌沙塞」「曇無德」といった者の説（あきらかに部派名を指している）が示されているが、それはそういった後代の挿入である（佐々木：解釈としてかなり苦しい。印順は、『毘尼母經』を雪山部の書と考えているが、信憑性はない。ともかく、上記の諸部派からの情報が混在する書であることは間違いない。）。

4. 上座部系諸律の犍度部から「摩得勒伽」文献群が成立したとは考えられない。その理由は、仏伝の存在状況にある。もし上座部系諸律の犍度部がもとになって、「摩得勒伽」文献群ができたのなら、『摩訶僧祇律』も本来は上座部系諸律と同じ構造をもっていたのが、あとで今の形に改変されたということになる。そうすると、『摩訶僧祇律』の犍度部の冒頭にも、もともとは仏伝が入っていたことになる。しかし今の『摩訶僧祇律』犍度部の冒頭部分にはまとまった仏伝は存在しない。このことから、本来存在していた仏伝が、独立して今の Mahāvastu になったという説がでてくる（佐々木：つまりフラウワルナーの考えたプロセス）。しかしこれは正しくない。理由は以下のとおり。現存『摩訶僧祇律』犍度部は四種類の受具足戒の内容を説明するところから始まるが、その四種の一々について、その成立因縁として短い仏伝が付されている。もしもともとここに存在していた仏伝が Mahāvastu として独立したのなら、ここのそのような仏伝が残っているはずがない。したがって、『摩訶僧祇律』犍度部は最初から今のようなかたちだった。犍度部の冒頭に大部の仏伝が導入されたのは、その「摩得勒伽」型犍度部が上座部の手によって、別の構造に改変された時である。（佐々木：印順の批判は不適當。ここで印順が言う『摩訶僧祇律』に現存する短い仏伝とは、本当に短い仏伝である。断片的に散在しており、全部足しても大正大蔵經一ページ足らずである。本来の仏伝が抜



き出され、そのあとを補うかたちで簡略な仏伝記事が、各受戒作法毎に添付されたと考えれば問題はない。同じ現象が、「出家事」から「破僧事」への仏伝の移動においても起こっている→上記佐々木論文）。

以上の考察により印順は、『摩訶僧祇律』に代表される「摩得勒伽」型<sup>1</sup> 羯度部がどのように改変されて、上座律系羯度部になったのか、そのプロセスを説明する。

（佐々木：フラウワルナーと印順は、互いに独立に、律蔵羯度部の成立プロセスに関して全く逆の説を提唱している。ただし印順もフラウワルナー同様、「摩得勒伽」文献群と上座律羯度部は各要素単位ではよく一致するのに、構造だけが大きく異なっているという事実を考察の前提としている。だからこそ、両者に上のような変遷過程を想定したのである。なお、佐々木は、フラウワルナーの論考とは全く別個の論証によって、フラウワルナーと同じく、上座部系諸律の羯度部から『摩訶僧祇律』羯度部が成立したという説を提唱している。『インド仏教変移論』）

Shayne Clarke(2004) (“*Vinaya Māṭrkā* - Mother of the Monastic Codes, or Just Another Set of Lists? A Response to Frauwallner's Handling of the *Mahāsāṃghika Vinaya*”, *III*, 47-2, 2004, pp.77-120.)

1. この論文においてクラークは、二つの点で新たな貢献をなした。今まで独立に存在していて、誰も総合的に考察することのなかったフラウワルナー説と印順説を並べて見せることにより、律蔵成立問題に関する新たな研究領域を開いた。チベット訳でのみ伝わる根本有部律系の律文献 *Uttaragrantha* 中の *Māṭrkā* 部分が、「摩得勒伽」文献群の新たなメンバーであることを発見し、根本有部系の律にも「摩得勒伽」が伝わっていたことを明らかにした。

これはきわめてすぐれた業績である。しかしこの論文で彼が新たに提示した情報はこれだけであるという点に注意せよ。クラークは、これだけの情報をもって、以下のような説を主張するのだが、そこに論理的問題が存在する。

2. この情報により、上座律形の羯度部がもとになって、『摩訶僧祇律』の羯度部が成立したとするフラウワルナーの説は否定される（佐々木：??）。クラークの論理は以下のとおり。「フラウワルナーは、上座律形の羯度部がもとになって、『摩訶僧祇律』の羯度部が成立したと推測し、その推測を裏付けようとして、無理に上座律形の羯度部から『摩訶僧祇律』の羯度部が作られるプロセスを考えた。しかし、『摩訶僧祇律』羯度部と同じ構造を持つ文献（「摩得勒伽」文献）が複数みつかったのだから、そのような無理なプロセスを考える必要はない。したがって、

フラウワルナーの考えたような変遷過程は否定される」(クラークは、犍度部の変遷



佐々木：この状況だけで上座部系諸律→摩訶僧祇律という過程が否定されるか？

に関する印順の説を容認しているのではない。『摩訶僧祇律』以外にも同類の「摩得勒伽」文献が存在するという事実だけで、上の主張が導けるというのである)

#### 問題点

1. フラウワルナーは、突然なんの根拠もなく、犍度部の変遷過程を想定したのではない。上で紹介した仏伝研究の必然的結果として、『摩訶僧祇律』の犍度部は、本来上座部系の律と同じ構造であったものが、後に改変されたに違いない」との結論に達し、それに沿って、その改変過程を説明したのである。ところがクラークは、そういった研究内容は一切無視して、まるでフラウワルナーが根拠のない思いつきで犍度部の変遷を説明しているかのように語り、それを否定しようとする。フラウワルナーの説を否定するなら、仏伝を枠組みとして律が成立したという、フラウワルナーの研究の最重要部分を否定しなければならない。それが否定されない限り、犍度部の変遷に関するフラウワルナーの説は(それが正しいにしろ誤っているにしろ)、仮説としては有効である。

2. フラウワルナーにしろ、印順にしろ、『摩訶僧祇律』犍度部(および他の「摩得勒伽」文献)と、上座律犍度部が、個別要素の単位では非常によく一致しながら、構造的には全く違うという点を問題の核心と考え、その謎を解くために論を展開した。ところがクラークは、研究の冒頭において、「両者の一致点は論点とはしない。今は、その構造的相違だけを考察する」と言って、類似性を考察範囲から排除している。最初からこのような姿勢をとるなら、当然の帰結として、「両者は別物である」という結論しかでるはずがない。「別物でありながら、これほ

どの一致点があるのはなぜか」という疑問が重要であるのに、それを最初から排除してしまえば、「両者はどう関係するのか」という問題意識は起こりようもない。実際、クラークの考察の結論は、単に「フラウワルナー説は否定される」というだけで、それに代わる別の状況説明は一切提示されない。最も重要な前提情報を無視しながら議論を進めるという態度は不適切である。

3. これが最も深刻な問題点である。フラウワルナーも印順も、律の慥度部がどのような過程を経て現在の形状になったのか、その変遷過程を論じている。つまり、ここでの論点は、「変化の過程」である。したがって、彼らの説を承認するにせよ、否定するにせよ、批判者は「変化の過程」に関する自分なりの説を持っていなければならない。ところがクラークはフラウワルナー説を否定するために、自分なりの「変化の過程」に関するアイデアではなく、ただ単に「現在の状況」を根拠としてだしてくる。議論の土台が狂っているのである。クラークの説が、私に異常な違和感を抱かせるのはこの点である。これを例を使って説明する。

知性のある宇宙人が地球へやって来て生物を調査していたと仮定する。

1. 彼らは日本で、人間（黄色人種）と猿という二種の動物を発見した。詳しく調べたところ、この黄色人種と猿にはきわめて多くの一致点がみつかったが、しかし相違点も多く、両者の関係について、宇宙人の学者たちは様々な意見をだした。

2. そのうちの一人（フラウワルナー）は、詳細な考察の結果として、猿（上座部系律）がもとになって黄色人種（『摩訶僧祇律』）ができたという説をだした。

3. その後、数年して、今度は別の場所で、白人、黒人といった別のヒト科の者たち（『摩訶僧祇律』以外の「摩得勒伽」文献）が発見され、それらは黄色人種（『摩訶僧祇律』）と同類であることが証明された。

状況は以上である。クラークの説をここに適用するなら「白人、黒人といった、同類の人種が発見されたのだから、猿から黄色人種ができるといった複雑な状況をわざわざ想定する必要はない。したがって猿から黄色人種ができたという説は否定される」となる。猿→黄色人種説を否定するためには、そのような経路が絶対にありえないことを証明する証拠をだすか、それとも猿→黄色人種説以外の別のなんらかの経過によって現在の種の状況が説明できる新たな説を提示するかのいずれかである。いずれにしろ、それは「変化の過程」に関するなんらかの意見が根拠となる。人類に複数の人種が存在しているという単なる「現在の状況」は

論拠としては使えない。人間には黄色人種以外にも、それと類似した別の人種がいるという「状況」は、「なぜそのような状況になったのか」という「変化」に関する疑問に答えるための根拠にはならないということである。クラークがだしてくる論拠は、フラウワルナーや印順の議論とは次元が異なっており、使用不能なのである。クラークの論を見て、「論証が間違っている」という印象よりも先に「論証になっていない」と感じる理由はここにある。

クラークの説の矛盾は、発見の順序を逆にしてみるとよく理解できる。印順の発見が先にあり、複数要素からなる「摩得勒伽」文献群の存在が確認されたあとに、フラウワルナーが現れて、犍度部仏伝説を主張し、その結果として「現在の『摩訶僧祇律』犍度部も上座律と同じ構造であったに違いない」と考え、その考えに沿って上座律犍度部→『摩訶僧祇律』犍度部というプロセスを考案したとしてもなんの矛盾もない。上座律犍度部から『摩訶僧祇律』犍度部がつくられ、その『摩訶僧祇律』犍度部が核になって「摩得勒伽」文献群が成立したと考えることは十分可能である。ただ単に、「摩得勒伽」文献群の存在を指摘しただけではフラウワルナー説は否定され得ないのである（印順説を認めた場合にはフラウワルナー説は否定される。しかしそのためには、仏在世時に律の大部分は成立していたとか、第一結集の時にマトリカーが誦出された、といった大胆な仮説を無条件で承認しなければならない。クラーク自身、印順説を自分の論の根拠にはしていない）

以上、クラークの論証の欠陥を指摘したが、彼が発見したことは、その欠陥を補って余りあるほどに重要である。律の成立の関して新たな議論が展開することを期待している。

〈キーワード〉 律, 摩得勒伽, mātrkā, Clarke

平成 17 年度学術振興会科学研究費補助金基盤研究 C の研究成果の一部

(花園大学教授, 文博)



conditions: 1) to be a separate single thing, and 2) to be an indivisible thing. When it is recognized that a dharma exists as substance, the expression “the *svabhāva* of a dharma” is equivalent to the expression “the dharma itself”. At least for the Sarvāstivādins, the *svabhāva* does not exist separately from its dharma. In other words the *svabhāva* is not any separate object that belongs to the dharma, or one of the constituents of the dharma. The *svabhāva* is just a concept that represents, in the system of Sarvāstivāda dogmatic ontology, the identity of its dharma and dharma’s basis for real existence.

#### 167. Present Condition on the Problems of the Compilation Process of the Vinaya Materials

Shizuka SASAKI

At present we do not have a clear understanding of the historical process through which the existing Vinaya materials came into being. One of the most noteworthy points in this field is the difference in structure between Theravāda Vinayas and the Mahāsāṃghika Vinaya. It is thought that the compilation process of the Vinaya may be clarified by explaining the reason for this difference. On this point, scholars such as Frauwallner, Hirakawa, Yinshun, Clarke and myself have presented various theories. Clarke’s theory, the most recent addition to the discussion, rejects the thesis of Frauwallner’s famous work. If Clarke’s criticisms are correct, then his interpretation is a revolutionary contribution to the study of the Vinaya. However, there is a serious logical contradiction in Clarke’s theory, and therefore Frauwallner’s theory cannot be dismissed. In this article, I will outline these past theories and point out the problems in Clarke’s work.

#### 168. Prajñākaragupta on Other Minds

Hisayasu KOBAYASHI

If external objects did not exist, then how is it that one state of consciousness is not limited to just one person but experienced by many alike, so that